

体質医学研究所時代の原田先生

石坂 美代子

熊本学園大学水俣学研究センター

はじめに

原田先生の経歴を見ると、昭和39（1964）年3月の熊本大学大学院修了後平成22（2010）年3月に熊本学園大学を退職されるまでの46年間の研学生活のうち、27年間は熊本大学体質医学研究所気質学研究部で過ごしておられる（研究所の名称などは途中で変わったが研究室はそのままであった）。その27年間、私は先生のそばで、脳波検査、心理検査、文献複写、原稿の清書などといった形で研究補助をさせていただいた。先生が学園大に移られてからは先生とお会いする機会も少なくなっていたが、再度先生の仕事の手伝いをするようになった。そのきっかけは、先生が脳梗塞で倒れられたことである。大学病院入院中に、奥様を通じて、「やり残していることがあるので手伝ってほしい」との電話があり、熊大退職後の平成19（2007）年4月から水俣学研究センターの嘱託職員になり、また先生の仕事のお手伝いをさせていただくことになったのである。ということで、熊大時代と合わせると通算33年間先生のそばで仕事をさせていただいたことになり、今回は熊大時代の先生をよく知る者の一人として、執筆させていただくことになった。

体研気質（タイケンキシツ）とはどんなところ？

原田先生はよく「タイケンキシツにいた頃」とおっしゃっていた。タイケンキシツとは「体研気質」のことで、熊本大学体質医学研究所気質学研究部（主任：鹿子木敏範教授）の略称である。先生が熊本大学精神科から熊大体研気質に移籍されたのは昭和47（1972）年5月のことである。当時先生は熊本大学医学部附属病院（精神科神経科）講師という身分で、気質学研究部の助教授がその年の1月に急逝されたため、その後任として講師の身分のまま移籍されている。憶測だが、当時先生は水俣病関係で非常に多忙で、外来診療、病棟回診といった臨床医としての職務に専念できる状態ではなく、「とにかく気質学教室に」ということになったのかもしれない（助教授に昇任させるには確か教授会の承認が必要）。7月には助教授に昇任された。

その熊本大学体質医学研究所は、昭和14（1939）年、熊本医科大学（熊本大学医学部の前身）の附属研究所として設置され、昭和24年、新制大学の発足に伴い熊本大学の附置研究所となった。その後、昭和59（1984）年、改組によって医学部附属遺伝医学研究施設となり、体質医学研究所はなくなった。原田先生が在籍されていた気質学研究部は遺伝疫学部門となり、平成4（1992）年にはさらなる改組で医学部附属遺伝発生医学研究施設分子病態部門と

なったが、その後、平成12（2000）年に熊本大学発生医学研究センター、平成21（2009）年に熊本大学発生医学研究所となり、現在に至っている。今では体質医学研究所の存在を知る人も少ない。

では、原田先生がいらっしゃった体研気質とはいったいどんなところだったのか、簡単に紹介しておこうと思う。

新制熊本大学の附置研究所となって10年目の昭和34（1959）年に、熊本日日新聞社が「地域社会と密着した大学の発展のためには県民が大学を認識し、愛することが何より大切」ということで1か月にわたって特集記事を掲載し、その記事を1冊にまとめた小冊子『熊本大学 10周年をむかえて』があるが、その中の体質医学研究所の項に以下の記述がある。

（略）“体質医学研究所”というカンバンは一般大衆にはピンとこない。“体研”は医学部の付属部ではない。（略）しかも“日本にただ一つ”の研究所で、ドイツに似たものがあるだけ、アメリカにさえないと鼻息は荒い。では体研は何をやるどころか。ウタイ文句は“国民体位の向上”だ。

こんな笑い話もある。帝国陸軍はなやかなりしころ、第六師団はなぜ強いのか、の研究をするため“日本一”の研究所ができた、というわけだ。“体質”については勝手な定義が多い。あの関取の体質とか、ジマシン体質とか、いろいろいい方があるが、各人各様の体のクセを総合したものだ。

このクセはつぎの三つからなる。①形質（ヤセ形とかデブとか）②素質（汗カキとか下痢をしやすいなど）③気質（心的現象上の特徴、モッコスとか、怒りっぽいなど）これをひっくるめて体質というのだ。ところでいままで“気質”の講座がぬけていた。つまり体質研究に画竜点睛を欠いていたわけ。今年の四月から「気質学研究部」が増設されたが、最初は文部省がなかなか認めなかった。そこで緒方前所長が南極探検にひかけて、「南極探検の成功はひとえに隊員の“心”と“体”の釣合いがとれているかどうかにかかっている。この理屈は一般生活にとっても極めて重大なことだ」と“泣かせどころ”をきかせたために、文部省もとたんに“笑顔”をみせたというわけ。

前期の「文部省がなかなか認めなかった」に関連して、緒方維弘（おがたこれひろ）所長から鹿子木教授にあてた次のような手紙が残っている。

・・・次に思いもかけざる不利な事態が発生致しました。それは御承知と思いますが参議院にて、諸審議引きのばしの余波をこうむり、全国全省にわたり、新規増員人事が一切審議未了になりました。それでどうしても次の臨時国会を待たざるを得なくなり・・・発令が少しおくれます事を御諒承下さいませ。・・・私が五月二十八日に研究所長会議に出席のため上京致します。・・・直ちに文部省に出頭、諸交渉致します。・・・新教室開設費として二百萬くれるという内達がありました。これは私の知る範囲では最高にて・・・最近のものが百万円でした。（5月8日付け）

結局、鹿子木教授への気質学研究部の教室主任としての辞令が発令されたのは昭和34（1959）年6月1日付で、原田先生の気質学研究部への移籍は、教室発足13年後のことであ

る。先述のように、私は先生が熊本学園大学に移られるまでの27年間ご一緒させていただいたのであるが、先生は度重なる改組によって部門名やスタッフが変わっても、ご自身の研究テーマを変えることなく、学園大に移るまで助教授として過ごされた。鹿子木教授の定年退官に伴い新たな教授が着任され、遺伝子レベルの研究が部門の主要な研究テーマとなり、それまでいた助手が辞めてしまっても、先生は変わらず、水俣病や公害問題に取り組み、世界中に調査に出かけ、その結果をまとめて発表するといった仕事を続けておられたのである。体質医学研究所気質学研究部が医学部附属遺伝医学研究施設遺伝疫学部門となったときには、先生はご自身の所属部門名を「遺伝疫学」ではなく「疫学 (Epidemiology)」と表記しておられたが、「疫学」であれば先生の研究内容にぴったりで、先生の面目躍如といった感がある。

体研気質で先生は何をなさっていた？

体研気質時代の先生の仕事は、某大学の教授選に推薦された際の鹿子木教授の推薦文をみていただくとよくわかる — なぜそのようなものが私の手元にあるかといえば、当時はまだワープロ、パソコンのない時代で、教授の手書きの文書を私がタイプしており、たまたま捨てずにもっていたのである。残念ながら書類の日付は不明。

1. 業績紹介

イ. 原田正純氏の専攻分野は臨床精神医学一般であり、とくにその診断と治療に主眼をおいている。

その研究は、主として二つの方向に沿って進められてきた。

まず第一は臨床脳波学的研究であり、これは睡眠の研究へと発展した。臨床脳波学の研究では、頭部外傷後遺症や分裂病状態と、異常脳波との関係を追求した。さらに、各種中毒（ボンド吸収、有機水銀中毒、CO中毒、CS₂中毒、サイクロセリン中毒、ヒロポン中毒等）の脳波と臨床症状との関係、予後との関係を検討している。なお非行少年、道交法違反少年、犯罪者、老人の脳波と予後の関係についても研究を行っている。睡眠に関しては、脳器質性疾患、とくに失外套症状群などの脳の崩壊過程から睡眠発生の機序を研究した。さらに、加齢やせん妄状態との関係も追究している。

第二は、中毒性疾患の臨床的研究であり、これには胎内中毒、および遺伝性、内因性精神疾患のモデルとしての中毒性疾患の研究が含まれる。この研究対象は、一酸化炭素中毒、二硫化炭素中毒、PCB中毒、砒素中毒、有機水銀中毒、マンガン中毒、シンナー、ボンドなどの有機溶剤中毒、アルコール中毒、医原性中毒等、多岐にわたっている。胎内中毒、あるいは外因性胎児障害に関しては、胎児性水俣病、胎児性PCB中毒、サリドマイド、放射線による胎内中毒、さらに麻疹、トキソプラズマによる胎児障害などをとりあげている。とくに先天性水俣病の発見とその究明の業績に対しては、当時精神神経

学領域で最も権威ある賞とされた日本精神神経学会賞を授与された。その後の研究はさらにその治験を拡大し、深めている。

ロ. 学外での講義

上述のように原田正純氏は、精神神経科領域においても珍しい多彩な中毒の症例を経験している。とくに中毒には社会的背景を伴うため、医学部以外の分野においても貴重な症例とみなされることが多い。したがって、多くの大学の医学部やその他の学部から講義を委嘱されている。久留米大学医学部環境衛生学科では6年、東京大学医学部衛生学では6年、大阪大学教養部では2年、非常勤講師として講義を行った。現在も、名古屋大学医学部（以下略）……原田氏の研究は、単に中毒の症候論に留めることなく、その背景にある経済的・社会的側面をとらえ、技術・科学思想、精神史の角度から多面的な接近を試みている。

ハ. 学際的研究

疾病や障害の成因から治療対策に及ぶ幅広い同氏の研究には学際的協力が必要なので、いくつかの研究グループを結成している。

- a. 統計研究会、公害研究委員会（座長 都留重人氏）には、塚谷恒雄（京都大学経済研究所）、宇沢弘文（東京大学経済学部）、庄司光（京都大学医学部）、宮本憲一（大阪市立大学商学部）、淡路剛久（立教大学法学部）、宇井純（沖縄大学）、山本剛夫（京都大学工学部）、都留重人（前一橋大学長）他のメンバーが名を連ねているが、原田正純氏は医学者として実際の研究面の代表的存在である。これまでも国際環境調査団としてカナダ、アメリカ、北欧諸国、東欧、アジア諸国の調査を行った。なおカナダインディアン居留地調査では、公害と呼ばれる人間の環境破壊の前兆は、単なる自然破壊でなく、伝統的な文化、思想、生活様式の急激な破壊に始まる、という仮説を立てている。（略）
- b. トヨタ財団研究助成による環境調査団（団長：色川大吉）では、環境破壊による経済・社会的影響はもちろん、集落（ムラ）としての共同体、その中における民俗学的・伝統的生活様式や人々の精神面の崩壊などの研究を手がけている。（略）
- c. 日本生命財団研究助成による「一次産業が人間生活に及ぼす影響の研究班」（班員：淡路剛久、ほか）は、環境破壊による一次産業の崩壊のもたらす人間生活への影響について調査をし、老人や障害児、精神障害者の社会復帰には一次産業の再建が必要である（一次産業を崩壊させたままでは、これらの人たちの真の社会復帰は難しい）ことを明らかにした。（略）

ニ. 海外研究

1975年に国際環境調査団としてカナダインディアン居留地における水銀汚染事件を調査した。その後、ベネズエラの環境汚染事件（1980）、中国第二松花江の有機水銀中毒事件（1981）、タイの環境問題（1983）、インドネシアのジャカルタ湾の障害児多発事件（1983）、インドのボパールの農薬爆発事件（1985）、マレーシアの放射能事件（1986）、

韓国の汚染地区の健康調査（1986）など調査に出かけている。そのほか、ポーランド・アカデミー、中国科学院、タイのチュラロンコン大学環境研究所、インドのネール大学、ボパール大学、マレーシアのペナンなどで環境問題、中毒や職業病などについて特別講演や学術交流を行っており、海外の学者の来訪も多い。

2. 人物紹介

原田正純氏は、当代の公害研究の第一人者とみなされているため、報道関係から注目される存在である。原田氏と小児水俣病患者とのふれあいを描く特別番組を組んだことがある。患者のみならず若い世代の学生から敬慕されており、正規の講義以外にも東大、阪大、鹿大などの学生に求められて講演をし感銘を与えている。ときに同氏の思想的偏向を疑う向きもあったが、原田氏自身はきわめて謙譲で穏健な思想の持ち主であり、偏向とは全く無縁であることが知れわたるにつれて、このような偏見はかげをひそめた。大学医学部においては、昭和40年前半から助教授・講師会に推されて（常に第1位）教授会構成メンバーとなり、大学紛争のころからその堅実で建設的な主張は高く評価されてきた。人柄は明朗でユーモアに富み、どのような激論も融和させてしまう人徳の持ち主である。

臨床家としては、精神科医にとって最もものぞまれる人間的温かさとやさしさに恵まれている。患者の信頼は絶大であり、氏の外来診察日に訪れる患者も多い。氏は小学生のとき、防空壕の中で直撃弾により、ミッションスクールの英語教師であった母を面前で失うという不幸を体験しているが、弱者、病者に対するやさしい思いやりは、そういう苦難の体験によって培われたものかもしれない。

自由な雰囲気の中で・・・

改組されるまでの体質医学研究所は、事務部と全部門が一緒になってカレーパーティやクリスマスパーティをしたり、研究室で昼間ビールを飲んだり、教授がドイツから体研究に直送されたワインを冷やして飲んだり（今だと絶対に許されないことであるが）、原田先生にとっても古き良き時代ではなかったかと思う。手元にある古いアルバムには、先生がいらっしやっった頃の楽しい思い出がたくさんつまっているが、その楽しかった思い出をひとつご紹介しよう。

日本体質医学会というものがある。この学会は昭和30（1950）年に日本体質学会として設立され、平成14（2002）年に日本体質医学会と改称されたもので、事務局は現在熊大医学部代謝内科学教室にある。原田先生の熊大在籍中は日本体質学会と称し、理事長は体質医学研究所の所長で、研究所の教官はほとんど全員が会員であった。学会誌の編集担当理事が鹿子木教授であったため、その編集作業は私の役目であった。

学会の年次総会は当時、東京、大阪といった大都市と地方での開催が隔年ごとに行われていた。気質学研究部からも教授以下、原田先生、2人の助手が参加され、その間研究室はほ

ほ空っぽ状態となるので、北は北海道から南は沖縄まで、地方での開催の時はよく一緒に連れて行っていただいた。先生たちが学会に出席していらっしゃる間は適当に観光をし、終了後レンタカーを借りてみんなであちこちまわるのである。学会で誰も発表しないのではということで、いつも原田先生が、ご自身の研究と体質とを関連づけた演題を出していらっしゃる。

最初に行ったのは福島飯坂温泉で開催された時である。その時は、学会終了後レンタカーで小野小町生誕の地として有名な小町温泉へ行った。お店に売られているリングしか見たことのない私にとって初めて見るたわわに実ったリングは感動ものだったことを覚えている。

仙台での開催の時は原田先生の奥様（寿美子夫人）も同行され、5泊6日の旅で、山寺から湯殿山、NHKのテレビ小説『おしん』の舞台となった銀山温泉にも行った。行く先々に芭蕉の句があり、レンタカーの中でも句作、夕食のあとも句作と、私たちも句作に励んだ(?)ものである。その時に作った句を書きとめたノートを見ると、季語がなくて川柳めいたものもあるが、どこをまわったかがよくわかる句が多い。原田先生の句を紹介しておこう。

残月を肩に払いて月の山（月山にて）

山寺に芭蕉しのびて秋深し

羽黒山雨は走りぬ杉木立

湯につかり酒につかりて湯田の里

出羽の旅芭蕉の句作が邪魔をする

今ははや遊覧船の最上川

悲しさや銀山山師の夢のあと

福井での開催の時は、永平寺から白山麓（化石で有名な白峰村）、白川郷、飛騨高山へとまわった。白川郷では、ちょうど“どぶろく祭”にぶつかり、「NHKのニュースに映っては大変！」と心配しつつ、会場の隅っこの方でどぶろくの新酒の杯（コップ？）を重ねすぎてしまった。以下はこの時の原田先生の作。

永平寺坊主頭が金もうけ

秋深し白山の木々半紅葉（もみじ）

白峰の宿昔美人の酌で酔い

秋深しドブろく祭の旗ひらめく

若妻のエプロンまぶしどぶの味

みがきすぎ鼻すりむきし白峰の湯

飛騨の道駄作並べて満足し

旅の話のついでに旅費のことにふれておく。原田先生から「熊大にいたときはどこに行くのも自費だった」という話を聞いた人は多いと思う。確かにその通りで、水俣へいらっしゃる



福島での学会の帰り、小野小町生誕の地として有名な小町温泉。左から石坂、原田先生、鹿子木教授、堀田先生（1975年10月）

るのはもちろん、カナダ、ベトナム、中国、インド、アフリカなど、ほとんどの場合自費でいらっしやっただけ。なぜなら、熊大の場合、旅費の予算はあるが、各研究部門の人数にもとづいて積算され、しかも額はそんなに多くはなかったから、アルバイトをなさっていない教授に使ってもらい、助教授や助手は自費でということにしていらっしやっただけなのである。もちろん体質学会の時も。ロンドンで行われたUNEP（国連環境計画）のグローバル500賞の授賞式にいらっしやっただけ時は、奥様同伴ということもあって、共済組合の貸付を利用された一こんなことをばらして、と言われそうであるが、先生ご自身がよく「あの時は大学から借りて行ったもんね」とおっしゃっていたから、許していただけるものと思う。

臍の緒のことに気づかれたのはいつのこと？

ところで、原田先生の業績の一つに臍の緒の水銀値の測定というものがある。「臍の緒を調べたら汚染の状況がわかるのではないか」ということを思いつかれた時期は体研気質時代のことで、西垣先生との共著でNatureに発表されたときに「Natureに載るなんてすごい！」と思ったことを覚えている。

先般発刊した「原田正純追悼集」には先生の年譜が掲載されているが、その年表の昭和45（1970）年9月のところに、

「私に娘が生まれ、病院から臍帯を桐の箱に入れて持って帰ってきた時、私はこの保存臍帯を集めると過去の汚染の状況がわかるのではないかと思いついた。その夜は興奮して眠れなかった。

翌朝、私は水俣に電話をかけまくった。患者の家族が賢明に頑張ってくれたので、すぐ百個近く集まった。……」

とある。実は、この年譜の典拠となっている先生の著作『この道は』（熊本日日新聞社、1995年）には「昭和43年、私に娘が生まれ、病院から……」と書かれているのであるが、あえて「昭和43年」を削除し、昭和45年のところにもってきた。なぜ昭和45年9月としたのか、ここでどうしてもふれておきたい。

先生の著作によく「娘が生まれた時に病院からへその緒を持ち帰った」という話が出てくるが、その時期が異なるのである。ある本では

昭和43（1978）年9月に大学病院で次女が生まれた。……「無事生まれました。おめでとうございます。でも、すみませんまた女の子なんです。」主治医は……（水俣・もう一つのカルテ、1989年）

またある本では、

いろいろ模索していると、1970年10月、次女が生まれた。そのとき、小さな木箱にはいった臍の緒をもって病院から帰ってきた。それをみて「これだ！」という衝動が私を駆けめぐった。

（水俣が映す世界、1989年）

中には、「昭和46年10月、次女が生まれた。……臍の緒をもち帰った」（西日本新聞連

載「水俣にまなぶ 第一部」、1990年12月5日。『水俣の視図』、立風書房、1992年として出版)と、年も月も次女の誕生とは異なるものもある。次女の誕生は正しくは昭和45年9月である。

自分の子どもの生年月日を間違えるのはよくあることなのでそれはどうでもいいし、臍の緒を持ち帰ったのが昭和43年だろうと昭和45年だろうとどうでもいいだろうと思われる方もあるだろう。しかし、私としては、先生の業績をできるだけ正確に遺しておくためにどうしてもこの問題を明らかにしておきたいと思うのである。

その頃先生は、症状から胎児性水俣病だと確信していても、水俣病の発生は「昭和28年～35年」ということを根拠に認定されないので、どうしたら証明できるかと考えておられたようである。そのような時に、娘が生まれて退院の時に臍の緒を持ち帰りそれがヒントとなって、臍の緒の水銀を測ってみれば水銀汚染の時期が判明するのではないかと考え、「患者家族や支援者に電話をかけまくって臍帯を集め」られたのであるが、その時期について検証してみると、

- ・患者家族や支援者との関係ができるのは水俣病研究会に参加されてからと思われるが、水俣病研究会の発足は昭和44年9月、川本輝夫氏と出会われたのも昭和44年夏のこと。
- ・元熊本大学医学部衛生学教室の藤木素士氏らが昭和35年以前の環境汚染を探ろうと水俣地方の住民の臍の緒を集めてメチル水銀の分析を始めたのが昭和46（1971）年4月頃。分析の結果を昭和47（1972）年4月の日本衛生学会で報告。
- ・原田先生は最初臍帯のメチル水銀分析を東京都衛生研究所の西垣進先生に分析を依頼し、その後は藤木先生に依頼するようになられたが、西垣先生との共著論文がNatureに掲載されたのは昭和50年（Nishigaki, S., Harada, M.: Methylmercury and selerium in umbilical cords of inhabitants of Minamata area, Nature, 258, 324-325, 1975）
- ・水俣病支援者伊東紀美代さんの話 → 自分は水俣病研究会ができた年に水俣に来た。研究会で初めて原田先生にお会いした。その頃はまだ臍の緒の話は出ていなかった。45年が正しいと思う。

以上のことから私は、先生が「娘が生まれた時に病院から臍の緒を持ち帰った」とおっしゃるのは、次女の幸枝さんの出生のときだと思うのである。

おわりに

平成11（1999）年、原田先生が学園大に移られるということになった。先生は、九州内の某大学の教授就任がほぼ決まっていたところをとりやめて、学園大にお決めになったようである。それはなぜか？ 先生がそれまで考えをあたためていらしゃった「水俣学」ができるからということだったからに違いない。熊大時代の27年間だけでなく、水俣学研究センターでの6年間、通算33年もの間先生のそばで仕事ができただけで私は本当に幸せ者だと思う。とくに最後の6年の間には、『水俣への回帰』『宝子たち』『水俣学講義 第4・第5集』のほか

いくつかの先生の著作の校正などをさせていただいたが、それは先生の素晴らしさを再認識し、水俣病問題への理解を深める、非常に有意義な時間となった。心からの感謝を献げるものである。

先生は“水俣のことを子どもたちに伝える”ことが自分の責務のひとつだと思っていたら違ったに違いない。学校から依頼があれば、どんなに遠くても、交通費程度の講演料しか出なくても、スケジュールが空いているかぎり引き受けていらっした。そんな先生が、岩波書店から『岩波ジュニア新書 水俣病』（正式な書名ではないかもしれない）の執筆の依頼を受けていらっした。しかし先生は、病気のこともあり、多忙でもあり、なかなか原稿をお書きになれないようだったので、先生が学園大学をお辞めになるときに私は、「原稿を吹き込んでいただければテープ起こしをしますから」といってカセットレコーダーを差し上げた。しかし、奥様の話では、最後の最後までこの本のことを気にかけていらっしたようであるが。残念ながら『ジュニア新書 水俣病』が書店に並ぶことはなかった。先生はもっともっと子どもたちに水俣のことを伝えたかったに違いないと思う。でも、先生が残されたものはたくさんある。著書で、映像で、人間が大好きだった先生のやさしい“まなざし”にいつでもふれることができる。子どもも大人も。

（この稿は『原田正純追悼集 この道を — 水俣から』（熊本日日新聞社、2012年）に加筆したものである。）